

翻  
訳

戯曲 ハイナー・ミュラー作

「指令—ある革命への追憶」

谷  
川  
道  
子

アントワーンヌ

女

水兵

絶望の天使

ドゥビュソン

ガルデック

サスポルタ

女奴隸

初恋

「指令—ある革命への追憶」

サスポルタ・ロベスピエール

ガルデック・ダントン

エレベーターの男

ガルデックからアントワヌへ。この手紙は死の床で書いている。私と、ポートルロイヤルで絞首形にされた同志サスポルタの名において、貴君に伝える。フランス国民公会が貴君を通して我々に与えた指令を返却せざるをえないことを。我々にはその遂行が不可能になった。他の者ならもつとよくやってくれるかもしれない。ドゥビュソンについてはもう耳にすることはないだろう。彼は元気だ。恐らく、民衆が血にまみれる時に裏切り者たちは元気な時をすごすということだろう。この世界はそう仕組まれている、残念ながら。乱筆許されたし。奴らに片足を切断され、熱にうなされながら書いているからだ。この手紙を貴君が無事に受け取られんことを。共和主義の挨拶をこめて。

(水兵、アントワヌ、女)

水兵Ⅱ市民アントワヌさんですね。あなたへの手紙です。ガルデックという人から。この手紙が古くなってもう用済みだとしても私のせいじゃないですよ。あなた方の総督ボナパルトがイギリスと和平を結んでくれるまで、キューバジャスペイン人たちに、トリニダードではイギリス人に拘束されてたんですから。その後ロンドンで酔っ払って路上で追いはぎにもあったんですが手紙は無事でした。このガルデックさんという人のことで

すが、もう年とることもない。キューバの病院、というより半分刑務所ですが、そこでくたばってしまったからです。脱疽で入院してたんですがね、僕は熱病で入院してた。「この手紙を受け取ってくれ。届けて貰わなくちゃならないのだ。たとえ最後の最後になっても、僕のために届けてほしい」というのが僕への遺言でした。ある事務所の住所とあなたの名前が書いてあった、あなたがこのアントワーンさんだとすればね。だけどその住所にはもう事務所なんかなかったし、そこにいた人も誰もあなた、これがあなたの名前だとすればですが、アントワーンさんのことなんか全然知らない。建築現場の裏の地下室に住んでいた人が、アントワーンという人が教師として働いていたという学校を教えてくださいましたんだけど、その人たちも何にも知らない。それから掃除婦さんが自分の甥っ子がここであなたを見たというんでね、彼は車ひきなんです、その人があなたのことを説明してくれたというわけです。あなたがその人だとすればね。

アントワーンガルデックなんて人は知らないな。

水兵ガルデックさんにとってこの手紙がどの位重要だったのかは僕も知りません。何かある指令に関することなのですが、彼の仕事を他の人が更に遂行できるように返却しなきゃならないんだとか。一体どんな仕事だったのか、他のことは何にも語っちゃくれませんでした。もう呻くばかりでね、ひどい傷の痛みだったんです。波状的に襲ってくる。それも長いこと続いてね、死んでやっと免れた。医者が言うには心臓が強すぎたんだそうです。十度は死んだんじゃないかって。持ちこたえなすぎるといえる。生命なんて俗なものです。彼が手紙でかいているもう一人の人、黒人さんはさっさと死んじゃったし。手紙はガルデックさんが読みあげてくれたんです。もし失くなった時のために僕が暗記しているようになって。あなたがそれ

「指令―ある革命への追憶」

「指令―ある革命への追憶」

でも見当がつかないっていうのなら、彼が奴らにどうされて、どう死んでいったかお話ししましょう。あなたは居合わされなかったのですから。まず奴らは彼の片足を切断し、それから残った左足を。そして……

アントワーヌⅡ 指令なんて知らない。私が指令を出す筈がない、ボスじゃないんだから。家庭教師で金を稼いでいる身、それもわずかの―。それに殺しあいもう十分に見てきた。人間の解剖学には詳しいんだ。ガルデックか。

(女がワインとパンとチーズを持ってくる)

女Ⅱ お客様なのね。勲章を売ったの。あなた方が共和国のために農民を撲殺した、あのヴァンデーの戦いの時の勲章。

アントワーヌⅡ そうか。

水兵Ⅱ お見受けする所、あなたはまだすべてを持っておられる。あなたの御存知ないらしい、石ころのように殺されたあのガルデックさんに比べれば。もう一人はサスポルタという名前だった。ポートルロイヤルで絞首刑にされた。お知りになりたければいいですが、あなたの関知なさらないらしいあの指令のために、ジャマイカでね。絞首台は断崖にあった。死ぬと縄をとかれて海にまっさかさま、そして鮫の餌食。ワイン、いただきます。

アントワーヌⅡ サスポルタ。そう、私が君の探していたアントワーヌだ。気をつけなくちゃならないんだよ。フランスはもう共和国ではなくなった。我らが総督は皇帝になってロシアを侵攻中だ。挫折した革命について大声で語りたところだ。ブリキのメダルのために流された血。農民たちもどうしていいかわからなかったのだ。ひょっとしたら彼らの方が正しかったのかもしれない。争いと取り引きは花ざかりだ。今はハイチの農民に大

地をえさとして与えているというわけさ。あれは黒人共和国だった。自由が民衆をバリケードに導き、死者はめざめて自由のユニフォームを着る。うちあけた話が、自由も又、娼婦にすぎぬ。今なら私もそれを笑いとばせるよ、ハハハ……。が、ここには何かがない、かつて生きていた何か。民衆がバステイーユを襲撃した時、僕も一諸だった。ブルボン王朝さいごの首がはねられた時も一諸だった。僕は貴族どもの首を獲りとつたのだ。裏切り者たちの首の獲り入れ。

女Ⅱすてきな獲り入れだこと。又、酔っぱらったのね、アントワヌ。

アントワヌⅡ彼女は、僕が僕のあの偉大な時代について語るのがいやなのだ。俺の前ではジロンド党もふるえあがった。奴らを君に捧げたのだ、わがフランスよ。乳房は吸いつくされ、股間は荒され、新世紀の碎ける波間に浮かぶ廢船。見たまえ、あのうねりのさまを。フランスは血の海を必要としているのだ、そしてその日はきつとくる。

(アントワヌ・自分の頭に赤ワインをふり注ぐ)

水兵Ⅱ私にはわかりませんけどね、船乗りだから。政治なんか信じちやいないんです。世界は至る所ちがうんだし。これが手紙です。(去る)

アントワヌ(叫ぶ)Ⅱ家を出る時には気をつけなさいよ、船乗りさん。我らが長官フーシェの警察官さんたちは、君が政治を信じてるかどうかなんて訊ねはしないからね。——ガルデック。サスポルタ。君の足はどこだ、ガルデック。君の舌はなぜ首からとびだしてゐるんだ、サルポルタ。俺に何の用だ。君の足や君の首紐くものために俺に何ができる。俺の足も切ろってのか、俺も並んで絞首刑にされるってのか。君の足のことは君の皇帝にた

「指令—ある革命への追憶」

「指令—ある革命への追憶」

「ずねろよ、ガルデック。その舌は君の皇帝にみせるんだ、サスポルタ。奴は今ロシアで勝利を重ねている。道なら教えてやるよ。俺に何の用だ、行け、行くんだ、消え失せる。(女に) ねえ、君、奴らに言ってくれよ、立ち去るように。僕はもう奴らを見たくないのだ。まだそこにいるのか。君の手紙は届いたよ、ガルデック。ほら、ここに。ともあれ君らは終ったんだ。共和国万才。(笑う) 俺は元気だと思ってるのか。腹がすいてるんだろ、ほら。(死者たちに食べ物をなげる)」

女「さあ、ベットにいらっしやい、アントワヌ。」

アントワヌ「乳房の牢獄の中での金のかからぬ昇天、犬が心臓をもちこたえる限りは。」

(同衾の間に絶望の天使登場)

アントワヌ(声のみ)「君は誰だ。」

女(声のみ)「私は絶望の天使。この両の手で陶酔を、麻痺を、忘却を、肉の快楽と苦しみを分け与える。私の雄弁は沈黙、歌は叫び。翼のかげには恐怖がひそみ、私の希望は最後の一息、最初の戦さ。私は、死者が棺おけをこじあける時のメス。私は生れいずる者。私の飛行は暴動、私の天は明日の深淵。」

僕らはジャマイカに到着した。フランス国民公会の密使、名前は、ドゥビュソン、ガルデック、サスポルタ。

指令は、フランス共和国の名において大英帝国の支配に抗する奴隷の反乱を組織すること。フランス共和国—革命の母国、王権の恐怖、貧者の希望、すべての人間が平等に正義の鞭の下にある国、巷の住民の飢えにパンのひとかけらがなく、が自由・平等・友愛の松明をすべての国々に運ぶ手は十分にある国。僕らは波止場の広場に立

った。中央に檻かりがひとつ。聞えてくるのは海風、やしの葉のかたいそよぎ、黒人女たちがシュロの葉で広場を掃く音、檻の中の奴隷の呻き声、寄せては砕ける波の音。見えるのは黒人女たちの乳房、檻の中の奴隷の血まみれで腫はれあがった身体。これがジャマイカだ、アンチル列島の恥辱、カリブ海の奴隷船だ、と僕は言った。

サスポルヌ||僕らの仕事が終わるまでだ。

ガルテック||すぐとりかかれよ、奴隷を解放するために来たんじゃないか。檻の中にいるのが奴隷だ。今日解放してやらないと明日は奴隷の身でお陀仏だ。

ドゥピュソン||奴らは逃亡を企てた者、犯行を犯した者を檻にいられてさらし者にするんだ。みせしめに、太陽で干からびてしまうまで。十年前、私がジャマイカを出た時もそうだった。見るな、サルポルタ。一人を助けることはできぬ。

ガルテック||死ぬのはいつもひとりだ、複数で数えられるのは死人の数。

ドゥピュソン||死は革命の仮面だ。

サスポルタ||私がここから立ち去る時には、他の奴らがこの檻の中にぶらさがることになろう、白い肌の連中が、太陽にその肌を黒く焼かれるまで。その時にこそ多くの者が助けられるのだ。

ガルテック||ギロチン台の方がいいんじゃないかい。その方が清潔だし。血を浴びた赤い未亡人は最高の掃除婦だからな。

ドゥピュソン||巷の恋人か。

「指令―ある革命への追憶」

「指令―ある革命への追憶」

サスポルタ 僕は檻にこだわる、太陽が十分に高く昇れば白い肌には檻がいい。

ガルテック 互に肌の色を咎めあうためにここにきたわけじゃなからう、同志サスポルタ。

サスポルタ 互の肌をはぎとりあわないうちは僕らは平等じゃないのだ。

ドゥビュソン はじめ方がまずかったな。さあ、仮面をつけよう。私は私がかつてそうであった者、ドゥビュソン、ジャマイカの奴隷所有者の息子。四百人の奴隷をもつ植民地農場プランテーションの相続人。新しい哲学の硝煙と血の匂い

で重く暗雲たれこめたヨーロッパの空から、澄んだカリブの空の下へ、革命の恐怖が古きものはすべて新しきものよりよし、という永遠の真実への眼を開かせてくれたその後で、遺産相続のために家族の膝もとへ帰還。

つけ加えれば私は医者、奴隷であろうと主人であろうと関係なく人類を助ける者。すべてができうる限りあるがままであり続けるために、次から次へと治療する。私の顔は、この世では死以外に恐れるものをもたない奴隷所有者のバラ色の顔。

サスポルタ 死とその奴隷以外に―。

ドゥビュソン お前は何者だ、ガルテック。

ガルテック ギロチンの血の雨の中で革命を憎むことを学んだブルターニュ出身の農民。フランスの上だけでなく、血の雨よ、もっと降れ、と願っている、主人ドゥビュソンの忠実な従者。君主制と教会の聖なる秩序を信じている。祈らねばならない機会の多すぎないことを念じながら。

ドゥビュソン 君は二度も役を逸脱した、ガルテック。君は何者だ。

ガルテック ギロチンの血の雨の中で革命を憎むことを学んだブルターニュ出身の農民。主人ドゥビュソンの忠



実な従者。君主制と教会の聖なる秩序を信じている。

サスポルタ（まねをする）　　君主制と教会の聖なる秩序を信じています、君主制と教会の聖なる秩序を信じています。

ドゥビュソン　　サルポルタ、君の仮面だ。

ガルデック　　君には奴隷を演じるのはむづかしくなかるう、サルポルタ。君のその黒い肌なら。

サスポルタ　　ハイチでの勝利した黒人革命から逃れて、主人ドゥビュソンに加担したのは、神が私を奴隷制のためにつくり給うたからだ、私は彼の奴隷。これで十分だろう。

（ガルデック、拍手喝采する）

サスポルタ　　この次は刀で君に答えてやるからな、同志ガルデック。

ガルデック　　わかっているよ、一番難しい役を演じるのは君だってことは、サスポルタ。君の身体にかきこまれているんだからね。

サスポルタ　　僕らの手で、他の連中の身体に鞭で新しい文字を書きこんでやるのだ。

ドゥビュソン　　勝利した革命というのはよくないな。御主人の前ではそういういい方はしないものだ。黒人革命もよくない。黒人たちは起ちあがっても暴動をおこすのであって、革命はしない。

サスポルタ　　ハイチでの革命は勝利ではなかったというのか、あの黒人革命は――。

ドゥビュソン　　勝利をおさめたのは最悪のくずだ。今ハイチを支配しているのは最悪のくずにすぎない。（サスポルタつばを吐く）

「指令―ある革命への追憶」

「指令—ある革命への追憶」

ドゥビュソン 君はつばを吐く方向を間違えている。私はお前の主人なのだ。さあ、そういたたまえ。

サスポルタ ハイチを汚物だめにかえた最悪のくずを逃れてきた。

ガルデック 汚物だめはいい。君はのみこみが早いな、サスポルタ。

ドゥビュソン 顔から手を離して、この檻の中で死んでいく肉塊を見つめるがいい。君もだ、ガルデック。これは君の、君の、そして私の肉塊なのだ。彼の呻きは新しい世界を築きあげる肉体のラ・マルセイユーズだ。このメロディーを学ぶのだ。望むと望まざるとに拘らず、これが、まだしばしは聞き続けなければならない革命のメロディー、我々の仕事のメロディだ。多くの者がこの檻の中で死んでいくことだろう、我々の仕事が終るまでは。僕らが僕らの仕事を遂行すればこそ、多くの者がこの檻で死んでいく。それが、我々ごときにできる仕事なのだ。ひょっとしたらそれだけが―。もし僕らの仮面をはずすのが早すぎたら、僕らの死に場所もこの檻の中だ。革命は死の仮面、死は革命の仮面だ。

（大きな黒人が登場）

ドゥビュソン これはわが一族で最長老の奴隸、おしでつんぼ。人間と犬の中間といってもいい。檻につばを吐きかけるだろう。君もそうしなければならないかもしれない、サスポルタ、君が、必要な時には君のその黒い肌を憎むことを学ぶために。それから奴は私の靴に口づけをし、その唇をなめるだろう。さあ、見るんだ、奴が歓喜で鼻をならしながら、彼の古き、新しき主人である私をその背中にのせて、私の父たちの館に連れていくさまぞ。

（大きな黒人は檻につばを吐くと、サスポルタを見つめ、ガルデックに一礼し、ドゥビュソンの足に口づけをし、彼を背中



「指令―ある革命への追憶」

フランスでそう条文化されたからといって、なぜ彼らがここでも人間にならなきゃならないの。そんな条文はここ、お前の、私のいとしいジャマイカでは、奴隷制のために流されたたくさんの血を前にすれば、読めたるものじゃなくってよ。いい話をしてあげる。バルバドスで植民地農場の所有者が奴隷たちの暴動の二ヶ月後絞殺されたの。彼らが、解放された奴隷たちが彼の所にやってきて、教会でするように膝まずいた。彼らが何を望んだかわかる。自分たちを奴隷制の疵護の下に戻してほしいって。それが人間というものよ。最初の故郷は母親、監獄。（奴隷たちが洋服ダンスの中の母親のスカートを頭の上にもちあげる）さあ、ぼっかり口をあけてるわ、故郷が、あくびをしてるわ、家族の懐が。戻りたければ一言そう言えばいい。そうしたら白痴の女が、永遠の母がお前を一杯に満たしてくれるわ。バルバドスの哀れな男は運が悪かった。棍棒で撲殺されたの、彼のもと奴隷たちに、まるで狂犬病の犬みたいに。彼らを自由という冷たい春からいとしい鞭の下にひきとらなかつたばかりに。この話、気について、同志ドゥビュソンさん。自由は奴隷たちの背の上に、平等は檻の下にあるのよ。私の奴隷になりたい、ヴィクトールちゃん。私を愛して、これがあなたがキスした唇。（女奴隷が彼女の大きな口をあける）想いだすわ、ヴィクトール・ドゥビュソン、あなたの肌を。これがお前を暖めてあげた胸。（女奴隷が彼女の胸の乳首等を化粧する）お前の唇も手も忘れちゃいない。これがお前の汗を吸った肌、これがお前の精液をうけとめ、私の心を燃えあがらせた母胎。（女奴隷、彼女に青い心臓を描く）ほら、青い炎がみえるでしょ。キューバでは逃げた奴隷たちがどんな風にかまえられるか知ってて。猟犬のブラックハウンドで狩りたてられるのよ。だから私もそんな風に、お前の娼婦・革命が私から奪ったものを、私の私有財産を私の手に取り戻すの、同志ドゥビュソンさん。（犬の格好をした奴隷たちが鞭をもったガルデックとハッサのおびき笛をもった

父親の亡霊につきそわれて登場し、ドゥビュソンを狩りたてる。私の犬どもの歯でお前の汚れた肉から私の涙の痕跡を、私の汗を、私の快樂の叫びを咬みとってやる。犬どもの爪でお前の皮膚から私の花嫁衣裳を裁断してやるわ。殺された王侯たちの匂いのする息を、奴隷たちのあの苦悩の言葉にかえてみせましょう。私はお前の性を喰らいつくして、一匹の虎を産むの。熱帯の雨の中に消えてゆくむなし鼓動を私にきざむだけのこの時を、むさぼり食いつくしてくれる一匹の虎を。昨日私ははじめた／私の生命であるお前を殺すことを、お前の死体を愛することを、たとえ私が死んだとて、埃となつてお前を求め続けよう。ヴィクトールちゃん、あなたにこの雌犬をプレゼントしましょう。お前のその腐った精液のはけ口にね。その前にお前たちの血が混じりあうようにこの犬を鞭うたせることにしましょうか。私を愛して、デュビュソン。女を一人にしておいちゃいけないのよ。

(奴隷たちガルデックから鞭をとり、洋服ダンスを閉め、初恋の化粧をおとすと彼女を足台にしてドゥビュソンを王座に座らせ、ガルデックとサスポルタにダントンとロベスピエールの扮装をさせる。革命芝居の開幕。その二人の俳優と観客が席につく間、洋服ダンスの中から両親の会話がきこえてくる)

父||肉の復活だ。妄想は永遠にむしほみ続け、火は消えることがないのだ。

母||あの子は又、娼婦ごっこをはじめたわ。私の心臓は又ガクガク崩れてしまふ、ほら。

父||息子よ、お前にやるよ、ほら黒いのも、白いのも。

母||私の腹から刀をとりだしておくれ、お前ら、色塗りの娼婦たち。

父||ひざまずくんた、やくざ者、跪いて、お前のママに御慈悲を乞うんだ。

「指令—ある革命への追憶」

「指令―ある革命への追憶」

母Ⅱあ、その山の頂きに、あ、そこで、風が吹いている、あ、そこで、聖母が戦さをしている、神の子聖母が。グリーン

ランドへ帰ろう、さあおいで、子供たち。あ、ここでは太陽が毎日暖めてくれる。

父Ⅱこの白痴女の口をふさいでしまえ。

サスポルタロベスピエールⅡ席につきたまえ、ダントン、歴史のさらし台の席に。諸君、飢えた者たちのパンを貧り食うこの寄食者をみるがいい。人民の娘たちを犯し続けたこの快樂の徒を。革命が新しい社会の身体を育てるための血の匂いに鼻をつまんだこの裏切者を。教えてやろう、ダントン、なぜ君にはもう血を見る勇氣がないのか。君は革命と言った。が、君の革命とは肉の鍋をつかみとることにすぎなかった、女郎屋の招待席を。それでいて君は演壇の上で、賤民の喝采の中でふんぞり返っていた。貴族の長靴をなめるライオン。ブルボン王朝の奴らのつばはうまかったかい。君主制のおしりも暖かかったろう。君は大胆さを説いた。その化粧したたてがみを大胆にゆすってみるがいい。君が徳を嘲笑えるのもその首が正義の斧の下に落ちるまでだ。私は君に警告したはずだ、ダントン。今では君の話相手は新しい時代の崇高な発明物、このギロチンというわけだ。新しい時代は君を超えて、すべての裏切者を乗り超えて前進していくだろう。君のことは裏切り者のことば、あの九月に君はそれを実にくましくしゃべったものだ。（奴隸たちガルデックから、ダントンの首を打ち落とし、その首を投げあう。ガルデックはそれを取り返して腕の下に抱えこむ）そのすてきな頭をなぜ股の間にはさまないんだ、ダントン。そこにこそ、お前の放蕩のしらみと悪徳の潰瘍にまみれて、お前の悟性とやらが住んでいように。

(サスポルタ、ガルデックの腕の下からダントンの首をたたきおとす。ガルデック、這いつくばってその首を追いかけて、頭の上のにせる。)

ガルデックダントン 今度は私の番だ。諸君、顎あごのはずれたこの猿を見るがいい。自分の涎をとめられないこの吸血鬼を。もう血はたらふく吸ったはずではないか。徳とやらをお説教する清廉の士よ。これが祖国からの感謝か、この治安警察のおどしが。(奴隷たちがサスポルタからロベスピエールの顎の鞆帯をはずすと顎がおちる。サスポルタがあごと顎の鞆帯を探している間に) 何かが落ちましたか、何かをなくしたんですか。私有財産は泥棒です。頭に風を感じるでしょう、それが自由だ。(サスポルタ、あごと顎の鞆帯をみつめてロベスピエールの頭を元の形に戻す) 君の利口な頭が、ロベスピエール、民衆の愛によつてすっかりばらばらにされちまわないように気をつけなさいよ。君は革命と言った、正義の斧とね。ギロチンはパン工場じゃない。管理だ、ホレーショ、管理。(奴隷たちサスポルタからロベスピエールの頭を叩きおとすとそれでフットボールごっこをする) これが平等だ。共和、万才。僕は君に言わなかったかい、次は君の番だ。――(奴隷たちのフットボールに加わる) これが友愛。(サスポルタロベスピエールが吠える) フットボールはお嫌いか。お入りなさい。教えてあげよう、君がなぜこんなに僕の素敵な頭を欲しがったのか。賭けてもいい、君がそのズボンをおろしたら埃が舞うだろう。お集りの皆さん、革命芝居のはじまり。アトラクションは下半身のない男、マキシミアン大帝。有徳のマックス、安楽椅子で尻をこく男、アラスの靴みがき、吸血鬼ロベスピエール。

サスポルタロベスピエール (頭を再び上にのせて) 私の名前は歴史の殿堂パシオンに残るのだ。

ガルデックダントン じつと森に立ってさ／静かに黙って／深紅の王位の／マントを着てさ、

「指令―ある革命への追憶」

「指令―ある革命への追憶」

サスポルタロベスピエール⇨寄宿者、梅毒患者、貴族の召使い！

ガルテックダントン⇨偽善者、宦官、ウォール街の馬丁！

サスポルタロベスピエール⇨豚！

（お互に殴りあって両者の頭が又おちる。ドゥビュソン喝采する。奴隸たち彼を王座からひきずりおろすと、ガルテックを足台にしてサスポルタを王座に座らせる。サスポルタの戴冠）

サスポルタ⇨白人革命の芝居は終った。君に死刑を宣告する、ヴィクトール・ドゥビュソン。理由は君の肌が白いからだ。その白い肌の下で君の思想も白いからだ。君の眼が僕らの妹たちの美しさを見たからだ。その裸身に君の手が触れたからだ。お前の思想が彼女たちの乳房を身体を恥部を食くいつくしたからだ。お前が所有者、主人だからだ。だから我々は君に死刑を宣告する。ヴィクトール・ドゥビュソン。お前の糞は蛇たちに、尻は鰐に、睾丸はピラニアに食わせよう。（ドゥビュソン叫ぶ）お前たちの不幸は死ねないこと。だからまわりのすべての者を殺しまくるのだ。陶酔の余地などないお前たちの死んだ秩序のために、性なき革命のために。君はこの女を愛しているのか。それなら死にやすいようにこの女をとりあげてやろう。持たざる者の方が死にやすい。他に君のものは何がある。早く言うのだ。僕らの学校は時間なのだから。時は帰らず、教育の暇はない。学ばぬ者も死ぬのだ。お前の肌は誰からはぎとったのだ。お前の肉は僕らの飢え、お前の血は僕らの血管から吸いとったもの。お前の思想か、お前らの哲学のために誰が汗したのだ。お前の尿、お前の糞も搾取と奴隸制だ。お前の精液など語るまでもない、死体からとった蒸留水だ。さあ、これでもうお前のものは何もなくなくなった。今君は無だ。これなら死ねるだろう。奴を埋葬しろ。



私は見知らぬ男たちと一語に、昇るたびにガタガタ金属音をたてる古いエレベーターの中に立っていた。出勤日のサラリーマンか労働者のようないでたち、首を締めつけるネクタイなどつけて、汗まみれで、首を動かす度にカラーが首をこする。チーフ（私が思念の中でナンバーワンとよんでいる）に呼ばれている。彼の部屋は四階、ひよっとしたら二十階だったか、思いたせない。もう不安になっている。チーフ（私が思念の中でナンバーワンとよんでいる）からの呼びだしの知らせが地下の、防弾のプレートがかかっているだけの何も無い広いコンクリートの部屋の私に届いた。何かの指令を私に伝えようというのだろう。ネクタイの位置を確かめ、きちんと締めなおす。ネクタイの具合を確かめられるよう鏡があればいいのに。知らない人にたずねるわけにはいかないし。エレベーターの男たちは皆、ネクタイを完璧にしている。何人かは互に顔見知りらしい。低い声で何やら僕にはわからないことを話している。ともあれ彼らの会話が私の注意をそらしてしまったりしい。次に停った時エレベーターの階数表示は八になってびっくりする。乗り越してしまった。あるいはまだ半分にもきてないのか。問題は時間だ。真の時間厳守は五分前。さっき時計をみた時は十時だった。チーフとの約束の時間までまだ十五分あると安心したことを思いだす。次にみた時には五分しかたつてなかった。今、八階と九階の間で時計をみたら十時十四分四十五秒。真の時間厳守はすぎている。時はもう私のためには動いてくれない。すばやく状況を点検する。次に停まった時、どこでもいいからとび下りて、階段を一挙に三段とびで四階まで駆けおろるか。もし四階でなかったら、当然取り返しをつかない時間の損失だ。二十階までいってチーフの部屋がそこになかったら、四階まで戻ること考えられる。エレベーターが運休にならなければの話だが。運休だったら階段を二挙に三段

「指令―ある革命への追憶―」

「指令—ある革命への追憶」

眺びで) 駆けおるるか。焦ったらおっこちて足か首を折るかもしれない。担架にかつがれる光景が眼に浮かぶ。そうなったら頼んでその担架をチーフの部屋まで、彼の机の前まで運んでもらうか、今なお職務に忠実なしかしもう役立たずの部下として。さしあたってはすべてが、私の軽率さから前もって答えて貰いそこねた問いに収斂されてくる。一体チーフ(私が思念の中でナンバーワンとよんでいる)が何階で重要な指令をもって私を待っているのかという問い。(重要な指令に違いない、でなければ部下を通してその指令を私に伝えたはずだ。)ちらっと時計をみると、単純な時間厳守でさえもうとつに過ぎてしまっているという事実が争う余地なく明らかになる。エレベーターはまだ、確かめると、十二階にもきていないのに、時計は十、分針は五十、秒針はもはや問題にならない。私の時計が狂っているようにみえるが、確かめるすべもない。皆がどこで降りたのかも気づかないうちに、エレベーターの中は私一人になっている。髪の毛も逆だつほどの恐怖で時計をみつめる、もう眼を離すことができない。すると針はますます速く文字盤をまわる、まばたきひとつの間に何時間もが過ぎ去るほどに。何かがとつくに狂ってしまったのだ、私の時計か、このエレベーターか、時間か。とりとめのない思弁におちていく、重力喪失、機能麻痺、フットボールの際中のふくろはぎの痙攣のような地球の回転のどもり。エレベーターの速度と私の時計の示す時間の経過の間の甚しい矛盾を科学的に解明しうるには、私の物理学の知識は乏しすぎる。なぜ学校でもっとまじめにやらなかったんだろう。あるいは本の読み方を間違ったのか、物理学のかわりに文学なんぞ読んで。時間のたがはずれてしまったのに、四階あるいは二十階(この「あるいは」がメスのように私の軽率な脳髓をつきさす)のどこかで、多分重々しい絨毯のしかれた広い部屋で、おそらく狭い方の壁側に入口に向かつて置かれた机の前に座って、チーフ(私が思念の中でナンバーワンとよんでいる)が指令をもって、期待はずれにこ

の私を待っているのだ。ひょっとしたら世界のたががはずれてしまっているというのに、チーフが私個人に伝えようとしたほど重要な指令は、私の軽率さのせいで意味のないものになってしまったのかもしれない。私の学んだ官庁用語（無用の学問！）でいうなら無効に、棚上げされて誰もみることのできないものになってしまったのかもしれない。その指令は、私が今その開始を体験しているこの没落に対する、まさにさいごの可能な処置だったのに、狂ってしまったエレベーターの中に、これ又狂ってしまった私の腕時計と共に閉じ込められてしまった。夢の中で絶望的な夢をみる。身体を丸めさえすれば、このエレベーターの天井をつき破って時間を追いつ越す弾丸に変身する能力が私にあると。が、ゆっくり上昇するエレベーターの中で暴走していく時計を見て目がさめる。ナンバーワンの絶望を想い浮かべてみる。彼の自殺。役所のどの部屋にもその肖像が飾られているあの顔を机の上につぶして。（多分右の）こめかみの黒くふちどられた穴から血が流れている。銃砲の音は聞こえなかったけれど、それは何の証明にもならない。彼の部屋の壁は当然防音してあるだろうし、突発事故は建設の時に計算されていただろうから。それにしても、チーフの部屋で何が起ころうと住民には何の関係もないのだ。権力とは孤独なものだ。次に停まった所でエレベーターを降りる。と私は、指令をもたないまま、もう用なしになったネクタイを笑止にもあごの下に縮めたままで、ペルーの田舎道に立っていた。車のタイヤの跡のついた乾いたぬかるみ、道の両側には珍しい草のはえた荒涼とした平原。地平線のかなたにはぼんやり灰色の灌木のかたまりが見え、その向こうにかすかに山脈が泳いでいる。道の左側にバラック小屋、廢屋のようだ、窓はガラスの破片の残った黒い穴。外国製品の広告の看板があって、その前に二人の巨大な現地人が立っている。背中が威圧している。引き返すべきかと考える、まだ気づかれないのだから。チーフの所にむかう絶望的なエレベーターの

「指令―ある革命への追憶」

中では、私の牢獄ともいべきあのエレベーターにホームシックを感じるであろうとは思ひもなかったのに。この無人地帯にいる私をどう説明したらいいのだろう。落下傘も飛行機も車の残骸もさし示せない。エレベーターでペルーに到着したなんて言っても誰が信じてくれるだろう。私の前も後も地平線のかなたまで続く平原にはさまれた道ばかり。そもそもどうやって意志を疎通できようか。この国の言葉も知らず、おし同様。いっそ啞ならよかったのに、ペルーにだって同情心はあるうから。私に残されたのはできれば人間のいない所への逃亡、ひょっとしたらそれはひとつの死を逃れて別の死へいくことかもしれない。が、殺人の刃より飢えの方がいい。買収するすべもない。外貨でしかも殆ど現金なし。殉職は不可能だ。私の一件は遺失物、死んだチーフの部下である私への指令は彼の脳髓の中。もはやとりだすすべもない。永遠の金庫があかない限り。その金庫のあけ方を世界中の賢者が死のこちら側で努力中、ネクタイをはずすのが遅すぎたらうか。チーフの所に向かう途中、こいつを正しい位置に止めようとあんなに汗を流したっけ。こんなめだつ代物は上着の中に隠すことだ。証拠品をすんでの所で投げ捨てるところだった。振り返ってはじめて村をみる。粘土と藁わらの村。あいたドアからハンモックがみえる。みられていたかなと考えて冷や汗をかく。が、どこにも人の気配がない。唯一動いているのはモクモクと煙をたてるゴミの山をあさる一匹の犬。ためらいすぎた。男たちが広告の看板から離れて、道を斜めに横切ると私の方に向かってくる。さしあたっては私をみない。私のみあげて顔をみると、一人はぼんやり黒い顔、眼は白く、まなざしは像を結ばない。瞳孔がないのだ。もうひとつの顔は銀灰色。静かな長い視線。眼の色は定かでない、少し赤いものがちらちらする。同様に銀製と思しき重く垂らした右手の指は、ピクピク動き、血管が金属から浮きあがってみえる。銀色の男は黒い男と相前後して私の側を通りすぎる。私の不安は霧散し、少し

がっかりする。刺し殺されたり、金属製の手で絞め殺されたりする価値もないのか。通りすぎる五歩の間私にむけられた静かな眼ざしには軽蔑のようなものはなかった。私の犯罪はどこにあるのだろう。世界は没落しなかった、ここにあるこれが別の世界ではないとすれば。知りもせぬ指令を遂行することは不可能だ。この文明の彼方の砂漠で私の指令がどんな意味をもつというのか。チーフの頭の中にあるものが部下にわからうはずもない。この世のどんな科学を用いたところで、故人の脳髓から、失われた私への指令をとりだすことはできないのだ。彼と共に指令も葬られた。ひよっとしたら今すぐに行われているかもしれない国葬も、その復活を保証してはくれないだろう。快活さのようなものが私の中でひろがっていく。上着の袖をたくしあげ、シャツのボタンをはずす。今こうやって歩いているのは散歩なのだ。私の前を例の犬が横切っていく。片足を斜めに鼻先にあげ、指を私の方にむけて。やけどしたらしい。若い男たちが威嚇するように通りすぎていく。が、私を威嚇しているわけではない。道が草原にながれこむ所に、私を待っていたかのように一人の女が立っている。私は女に向かって手をのばす、何と長い間この手は女に触れてなかったらうか。と、ある男の声がする。その女は人妻だ。声の響きが断固としているので、そのまま歩きつづける。振り返ると女は手を私の方にさしのべて胸をひらいていた。草におおわれた土堤では二人の少年が蒸気機関と気関車で、中断された線路の上に交差点を組みたてている。ヨーロッパ人である私には一目でそれが無駄な努力であることがみてとれる。そんなものが動くわけがない。だが子供たちには何もいわない。労働は希望だ。私は歩きつづける。人間の消失以外のどんな労働も待っていない風景の中に。やっと私の使命がわかってきた。服を脱ぎすてる。外的なものなどもう問題ではないのだ。いつかもう一人の男が僕にむかってやってくるだろう。対立者が、雪でできた私の顔をもつ私の分身が。僕らのうち、どち

「指令―ある革命への追憶」

「指令―ある革命への追憶」

らかが生き残るのだ。

(ドゥビュソン、ガルデック、サスポルタ)

ドゥビュソン (ガルデックに一枚の紙を渡す。ガルデックとサスポルタ読む) 我々に、ここジャマイカで奴隷の暴動を組織せよという指令を与えた政府は、もう機能していない。総督ボナパルトは司令部を彼の擲弾兵の銃剣で解散させた。フランスとはナポレオンだ。世界は過去に戻るのだ、主人と奴隷の故郷に。(ガルデック紙を握りつぶす) 何をにらむのだ。我々の会社はもう商業登録簿にはのっていないのだ。倒産した。我々がここで売るべき商品、この通貨である汗と涙と血で支払われるべき商品も、この世での取り引きの対象ではなくなつた。(紙を破り去る) 我々を我々の指令から解雇する。ブルターニユの農民であるガルデック、お前を。奴隷の息子であるサスポルタ、お前を。ドゥビュソン、私を。

サスポルタ (小声で) 奴隷所有者の息子を。

ドゥビュソン それぞれ自らの自由へ、あるいは自らの奴隷制へかえるのだ。僕らの芝居は終わったのだ、サスポルタ。仮面をはぐ時には気をつけろよ、ガルデック。肌まで一語にはがれてしまわないように。お前の仮面はサスポルタ、お前の顔だ。私の顔は私の仮面だ。(顔を両手でおおう)

ガルデック Ⅱそう簡単にはいかないよ、ドゥビュソン。僕は農民だ、そんなにはやくは考えられない。一年、いやそれ以上の間、自分の首を危険にさらし、口がボロボロになるまで秘密集会で演説しつづけ、罎や猟犬や鮫やスパイの眼をくぐって武器を集めつづけ、イギリス人の首切り人どもの会議では君の犬として愚か者を演じ

つづけ、雪なき神に呪われたこの島で陽にやかれ、熱にうなされつづけてきた。それもこれもみんな、僕らの靴の下でしか動こうとしない黒い肉体のこの腐った連中のためにだ。ジャマイカの奴隷制が僕に何の関係がある。明りの下でみれば私はフランス人だ。待て、サスポルタ。だが私はこの場で黒人になろうと思う。これらすべてが、何故もう真実ではないというのか。パリでどこぞの総督がいばりくさっているからといって、指令が解除され、今や無に帰するところか。その理由がわかりさえすれば。奴はいまだかつてフランス人だったことがない。が、君のいうことを聞いていると、ドゥビュソン、君はこの総督ポナパルトを待っていただけではないかと思えるよ。

ドゥビュソン「ひょっとしたらたしかに僕はこの総督ポナパルトを待っていたのかもしれない。フランスの半分が彼を待っていたように。革命は疲れるよ、ガルデック。人民の眠りの中で総督たちがたちあがり、重すぎてもう背負えなくなった自由の鎖を断ち切るのだ。君の背中もこんなに丸くなってしまってるよ、ガルデック。

サスポルタ「僕にも君のいうことがわからないよ、ドゥビュソン、わからなくなった。この世は主人と奴隷の故郷だと。奴隷には故郷はないんだよ、同志ドゥビュソン。そして主人と奴隷のある限り、僕らには指令解除はないんだ。パリの総督ごっこが我々の指令であるジャマイカの奴隷解放に何の関係がある。何万という人が我々の命令を、お望みなら君の命令を待っている。しかし命令を出すのが君の声である必要はないわけだ。奴らは眠っちゃいない。総督を待ってもいない。殺す覚悟も殺される覚悟もあるのだ、自由の軛のために。日々の死であるその一生の間、まるでまだ見ぬ恋人を待つように夢みつづけたその自由の軛のために。その乳房がどんな具合か、その恥部がまだ処女か、そんなことなどたずねはしない。ここのそんな連中にパリが何の関係が

「指令—ある革命への追憶」

「指令—ある革命への追憶」

あろう。しばしの間希望の首 メトポリス 都だった遠くの瓦礫さ。フランスとは何だ、太陽が人を殺すことのない国、ア  
トランティスの墓場の背後の青ざめた大陸で、血がしばしの間朝焼けの色を持った国。お前らの総督、もうそ  
の名も忘れたが、そんなものはや問題ではないのだ。ハイチの解放者の名前がすべての教科書にのる時に  
は—。

(ドゥビュソン笑う)

サスポルタ 笑うのか。

ドゥビュソン 笑うさ、サスポルタ。理由をたずねるがいい。

サスポルタ 〓 そうだろう、私にはもう君がわからなくなったのだから。今君を殺すべきなのか、あるいは私が君  
に謝まるべきなのかさえ、わからない。

ドゥビュソン 〓 すきなようにするさ、サスポルタ。

サスポルタ (笑う) 〓 ああ、ドゥビュソン、一瞬僕は信じてしまった、君のいうことが君の意見だと。気づくべき  
だった。これはテストだと気づくべきだったのだ。僕はテストにおちたらしいな。僕らはそれぞれメスのよう  
に冷冽であるべきなんだ、合図が送られた時、戦いがはじまる時には。僕の神経を震わせるのは不安でなく舞  
踏への期待だ。たたかれる前に太鼓の音がきこえる。毛孔で聞くのさ、私の肌は黒いから。だが僕は君を疑っ  
た、これはよくない。許してくれ、ドゥビュソン、君は僕らのためにその手を血によごしたのだ。わかっただ  
き、それが君にどんなに辛かったか。だからこそ僕は君を愛するのだ、ドゥビュソン。奴は殺されなければな  
らなかつた、僕らが密告されないうために。奴も奴隷だった。が奴は次の拷問、君が人類の医者かつ援助者とし



て最初の拷問の傷をいやして次の拷問にむかわせるその前に、死を必要としたのだ。彼は言った、「殺してくれ、僕が裏切ることはないように。」だから君は医者及び革命家として、我々の仕事のために彼を殺したのだ。  
(サスポルタ、ドゥビュソンを抱擁する)

ドゥビュソン 謝まる必要はないんだ、サスポルタ。テストじゃあなかつた。僕らの名前が教科書にのることはないだろう。君のいうハイチの解放者も、歴史の本にのるまではずい分長く待たねばならないことだろう。あそこでは今、解放された黒人たちが解放された黒白混血たちに、あるいは逆の形で襲いかかっている。そうこうしているうちにナポレオンはフランスを兵營にかえ、ヨーロッパを戦場にかえるかもしれない。いずれにせよ争いと取り引きは花ざかり。イギリスとの和平もあろう。人類をひとつにするのは商売だ。革命にはもう故郷はないのさ。天が下、新しきものなし、新しき大地なし。奴隷制はいろんな顔をもっているが、最後の顔はまだみてないのだよ。君もだ、サスポルタ。僕らもだ、ガルデック。そしてひよっとしたら、僕らが自由の朝焼けと思つたものも奴隷制の新しい仮面にすぎなかつたのかもしれない。それに比べればカリブ等の地での鞭の支配は、パラダイスの歓喜というやさしい味がするということものだ。もしかしたら君のいうまだ見ぬ恋人、自由とやらも、その仮面がすり切れたら、裏切り以外のどんな顔ももっちゃいけないかもしれない。君が今日裏切らなかつたものが、明日君を殺すだろう。人間医学の立場からいうと革命は死産なんだよ、サスポルタ。バスターニューからパリ裁判所付属監獄へ。解放者から牢獄の番人へ。解放者に死を、が革命の最後の真実なのだ。それに、我々の仕事のためのあの私の殺人について言うなら、殺人者である医者というのは社会という劇場の中では何ら新しい声部パートではないのだ。死は人類の助力者にとっては大して意味あることではない。もうひとつ

「指令―ある革命への追憶」

「指令―ある革命への追憶」

の化学的狀態にすぎない。砂漠の勝利までは、ひとつひとつの廢墟が時代の牙に抗する礎石なんだ。もしかしたらサスポルタ、僕が僕らの仕事のために私の手を血に染めた時、それで僕は自分の手を洗っただけかもしれないんだよ。文学ガエウはいつも徒勞のことばだった、私の黒人の友よ。僕らが今他人の死体の襟首をつかんでいるのは、奴らを墓にほおりこまない限り、奴らが僕らの死になるからだ。君の死が自由なんだよ、サスポルタ。君の死が友愛さ、ガルデック。僕の死が平等。自由・平等・友愛がまだ僕らの馬だった頃は、僕らはその背にのって走ったものだ、明日の風をこめかみにうけて。今は昨日の風が吹いている。馬は僕らだ。身体に蹴爪があるだろう。僕らの馭者は荷物が一杯、テロの死体、死のピラミッド。重いだろう、僕らの腦の回転を疑惑がつかぬくからますます重くなる。革命には死者を数える暇がない。だから今、未来の指令に基いて僕らがこんなにも入念に準備をしてきたこの黒人革命をやめる時が必要なのだ、未来は他のものと同様すでに過去になったのだから。なぜ未来は僕らの言葉ではバラバラにしか聞こえてこないのだ、ガルデック。埃に声があるのなら、死者の世界ではちがっているのかもしれない。よく考えるんだ、サスポルタ、奴隸解放のために君の首を断崖におとす前に。この知らせがきた以上、指令に根拠はないのだ。僕らの仕事の痕跡を残さないために、私はこの知らせをうけいれるつもりだ。君たちも切っ端がほしいか。さあ、これが我々の指令だった、紙の味がするだけだ。明日はすべての肉が辿った道を歩むだろう。昇天には常に方向があるものだ。ひよっとしたら地球というこの星ももう、宇宙の冷たさを脱けだす途上にあるのかもしれない。ひと塊りの氷、あるいは金属、それが事実という大地に最終的な穴をあける、その大地に僕らはくり返し僕らのくずおれそうな希望を植えてきたというのに。それとも僕らの昨日と明日を永遠の今日に凍らせてしまうのはこの冷たさそのものか。

こんなことに一切関係のない一本の木になぜ僕らは生れてこなかったのだろう、サスポルタ。君が望むなら山でもいい、砂漠でも、どうだ、ガルデック。二つの石ころみたいに俺をみつめるなよ。なぜ僕らは單純に存在して風景の戦争を眺めないのだ。何が望みだ。もし生がいやなら自分の死を死ぬがいい。埋葬なんか手伝ってやるものか、もういやなのだ。昨日僕はニューヨークを歩く夢を見た。荒涼として白人なんか住んじやいなかった。歩道の僕の前に一匹の金色の蛇があらわれた。道を横切って向う側にいくと、いやその道は沸きたつ金属のジャングルだったが、それをくぐり抜けるとそこにも蛇がいる、青白く光って。夢の中では僕は知っていた、金色の蛇がアジアで、青い蛇がアフリカだ。目がさめるとすっかり忘れていた。僕らは三つの世界だ、なぜ今それを想いだすのだろう。その時ひとつの声も聞いた。見よ、大地震がおこった、主人の天使が墮ちたからだ、墮天使は立ちあがると入り口から石をころがしてきてその上に座った、姿は稲妻のごとく衣裳は雪のように白く。こんなことはもう忘れたいのだ。何千年もの間僕らの三人の恋人たちは笑い物にされてきた。街角という街角でこづき回され、世界の排水溝にまでおちぶれて、女郎屋でしごかれて。僕らの娼婦・自由、僕らの娼婦・平等、僕らの娼婦・友愛。僕ももうその笑われる所に身を置きたい。自由においしいものをたべ、僕自身と平等に、僕の朋友になること、さもなくば誰の友にもならないこと。サスポルタ、君の肌は黒いままだ。ガルデック、君は農民のままだ。君らも笑いものさ。私の場所は君たちが笑い物にされるころ。僕が君らを笑ってやるよ、黒人を笑いものにし、農民を笑いものにする。自由で我が身を白く洗いさらそうとする黒人を、平等の仮面をつけてのさばる農民を笑ってやるのだ。そして友愛の愚鈍さも笑ってやる。私、ドゥビュソン、四百人の奴隷の主人。イエスといひさえすればいいのだ、聖なる奴隷制の秩序にイエス、イエスと。

「指令―ある革命への追憶」

君の汚ならしい奴隷の肌に味方しようとして、サスポルタ、君の首に鞭をつけて尻をこく牛と君のものでもない畑を耕す四つ足の農民歩きに味方しようとして、ガルデック、奴隷の主人である私を盲目にしまった友愛の愚鈍さを笑ってやるのだ。私は世界のお菓子の私の取り分を要求する。世界の飢えから私の分を切りとるのだ。お前ら、お前たちにはナイフがない。

**サスポルタ** 君は私の旗をひき裂いてしまった。それなら新しい旗を私の黒い皮膚からつくるまでだ。(ナイフで手のひらに十字を切る) これでお別れだ、同志ドゥビュソン。(ドゥビュソンの顔に血まみれの手をおしつける) 僕の血はおいしいかい。僕は君に言った、奴隷には故郷がないと。あれは嘘だ。奴隷の故郷は暴動だ。僕は闘いに çıkかけていくよ、僕の屈辱で武装して。君は僕に新しい武器をくれた、感謝するよ。私の場所は絞首台かもしれない。ひょっとしたら僕がこうやって君を殺す代りに君と話をしているこの間にも、僕の首のまわりには縄がはえてでているのかもしれない。が、君からは僕の武器だけを借りておくよ、殺すことは無意味だ。絞首台で私は知ることだろう、すべての民族の黒人が私の共犯者で、その数は君が奴隷所有者のかいおけのそばですごく毎秒ごとに、あるいは白人娼婦の股の間ですごく毎秒ごとにふえつづけることを。生ある者が闘い続けられない時は死者たちが闘うだろう。革命の鼓動がすることに肉が骨に、血が血管に、生が死の中に戻ってゆくのだ。死者たちの暴動は風景の戦争になるだろう。僕らの武器は森だ、山だ、海だ、世界中の砂漠だ。私はアフリカだ。私がアジアだ。南北アメリカは私だ。

**ガルデック** 僕も一語にいくよ、サスポルタ。僕らは皆、死ななきゃならないんだ、ドゥビュソン。それが僕らがなお共有しうるすべてだ。グァデループの大量虐殺の時、すべてが黒人の死体のまん中に、同じように殺さ

れた白人の死体がひとつあったそうさ。そんなことはしかし、どのみち君にはもうおこりえないことだ、ドゥビュソン。君はおりたのだ。

ドゥビュソン「待ってくれ。僕は世界の美しさがこわいのだ、ガルデック。それが裏切りの仮面だということはわかっている。俺を、もう俺の肉に入りこんで痛みさえ感じさせなくなったこの仮面とふたりつきりにしないであらう。君たちを裏切る前に殺してほしい。サスポルタ、僕はこの世で幸せになるという恥辱がこわい。

ドゥビュソンは語り、つぶやき、叫んだ。だがガルデックとサスポルタは相次いで立ち去り、ドゥビュソンを、石の中から生れた蛇のように彼に歩みよっていた裏切りとふたりつきりに見捨てていく。裏切りである彼の初恋の顔をみる誘惑に抗して眼を閉じるドゥビュソン。裏切りは踊る。彼は両手を眼におしあてる。彼の心臓がダンスのステップのリズムを打つのが聞こえる。鼓動と共にそのリズムはだんだん速くなる。手のひらに逆らってまぶたがピクピクするのをドゥビュソンは感じる。ひょっととしたらダンスはもう終って、彼を脅かしているのは彼の心臓だけなのかもしれない。裏切りが両手を乳房の上で交差させ、あるいは腰に、あるいはもう太ももの間にしがみこませ、欲情のあまり恥部をけいれんさせて、うっとりするような眼でドゥビュソンをみつめている間は、幸福という恥辱への飢えを恐れて彼はこぶしを眼窩におしあてていた。もしかしたら裏切りはもう彼を見離してしまっただけかもしれない。欲情した手が、ついにドゥビュソンの職務をサポタージュした。彼は眼をあげた。裏切りはにっこりとその乳房を示し、だまって足をひろげた。その美しさは斧のようにドゥビュソンをつらぬいた。彼はバステューユの襲撃を忘れ、八万人の飢餓行進を忘れ、ジロンド党の最期も、テンプルの上に死者

「指令—ある革命への追憶」

「指令—ある革命への追憶」

・サン・ジュストをのせた晚餐も、黒い天使も、ダントンも、革命の声も、短剣の上に身をかがめたマラーも、ロバスピエールのはずれたあごも、首切人がその眼かくしをはずした時の彼の叫びも、観衆の喝采にむけたそのさいこの同情的な眼ざしも忘れた。ドゥビュソンは、まだ彼を見捨ててはいない最後の追憶に追いつがる。ラス・バルマスの砂嵐。こおろぎが砂とともに船までおしよせ、大西洋航海のお供をした。彼は砂嵐に抗して身をかがめ、眼から砂をこすりおとし、こおろぎの歌に逆らって耳を塞いだ。その時裏切りが天のように彼に襲いかかり、陰唇の幸福が朝薨けとなる。

—完—

原題：Heiner Müller, "Der Auftrag—Erinnerung an eine Revolution,"

所収：DDR, in "Sinn und Form," 1979. 6.

BRD, in "Theater heute," 1980. 3.

in "Schauspielhaus Bochum Programmbuch Nr. 30," 1982. 2.

(翻訳に際しては後者を底本に採用)

初演：DDR, 1980. 10, Berlin, Volksbühne. Regie: Heiner Müller

BRD, 1981. 6, Frankfurt a. M., Kammerspiele. Regie: Wilfried Minks.

〔ハイナー・ミュラー略年譜〕

一九二九 ザクセンのエッペンドルフに生れる。兵役、捕虜。一九四五以後高校卒業資格取得、司書、ジャーナ

リストとして活動。

一九五〇頃から詩、作文、戯曲稿執筆開始（「闘い」は五一年の稿を七四年に戯曲として完成）

五十年代中葉から作家同盟、ドラマ部門の協力者、及び雑誌「ユンゲ・クンスト若き芸術」の編集者。

一九五五 「トラクター」執筆開始（六一年完成七四刊行）

一九五六 「賃金抑圧者」を妻のインゲ・ミュラーと共作（刊行一九五七）。「ゲルマニア・ベルリンの死」執筆開始（七一年刊行）。

一九五七 ジョン・リードによる「世界を揺るがした十日間」東ベルリンで初演。

一九五八 二年契約で東ベルリンのマキシム・ゴリキー劇場の協力者に。「フィロクテート」執筆開始（完成刊行六四年）。「賃金抑圧者」ライプチヒで初演。

一九五九 妻のインゲ・ミュラーと共に「賃金抑圧者」でハインリヒ・マン賞受賞。

一九六一 カールホルストの学生劇団で喜劇「移住者、あるいは田舎の生活」初演。党と国家上層の干渉で上演中止。この件で作家同盟より除名される。

一九六三 「建設」執筆開始（六四年完成）。

一九六四 批判された「移住者」の新稿「農民たち」完成。

一九六五 SEDの第十一回中央委員会はヴォルフ・ビアマンの詩と共にハイナー・ミュラーの「建設」を批判。

一九六六 「フィロクテート」、「ヘラクレス5」、「僭王オイディプス」完成。妻のインゲ・ミュラー自殺。

一九六七 シェークスピア「お気に召すまま」改作。「僭王オイディプス」ボッフムでBRRDハイナー・ミュラー初演。「プロメテウス」執筆開始（六八年完成）。

一九六八 教育劇「ホラティア人」完成。デッサウのオペラ台本「龍のオペラ」完成。

一九六八 「女たちの喜劇」、「ホリゾン」完成。

一九七〇—七六年までベルリーナー・アンサンブルの文芸部員となる。「マウザー」完成。

一九七一 「ゲルマニア・ベルリンの死」、「マクベス」完成。ハイナー・ミュラーの「歴史のペシミズム」をめ

「指令—ある革命への追憶」

「指令―ある革命への追憶」

ぐって論争

- 一九七二 「セメント」完成。「マクベス」東西ドイツで初演。
- 一九七三 「セメント」ベルリーナー・アンサンブルで初演。
- 一九七四 「闘い」、シナリオ「メディアアごっこ」完成。「ヘラクレス」「プロメテウス」初演、「賃金抑圧者」BRD初演。
- 一九七五 USA滞在。「トラクター」「闘い」初演。「マウザー」USAで初演。「セメント」、「トラクター」、「闘い」BRD初演。レッシング賞受賞。
- 一九七六 ベルリン・フォルクスビューネの文芸部員となる。「農民たち」初演。「グントリングの生プロイセン大王レッシングの眠り夢叫び」完成。
- 一九七七 「ハムレットマシーン」完成。
- 一九七八 プレヒトの「ファッツァー」断片を舞台稿に。「ゲルマニア・ベルリンの死」BRDで初演。「ハムレットマシーン」BRDケルン初演が挫折。
- 一九七九 「指令」完成。「ハムレットマシーン」BRD初演。「ゲルマニア・ベルリンの死」でミュールハイムの劇作家賞受賞。
- 一九八〇 「建設」、「指令」初演。ラクローの「危険な関係」をもとに「カルテット」完成。
- 一九八一 「指令」BRD初演。
- 一九八二 BRDポッフムで「闘い」、「指令」（ハイナー・ミュラー演出）、「カルテット」（初演）連続上演
- （付記：ポッフム・シャウシュピールハウスの上演パンフ所収の年表をもとに作成。作品、初演等は主要なもののみを記載。）